

小川

おがわ・ちゆうじ

忠治

さん

週3日、千歳陸上競技スポーツ少年団の指導者を務め、子どもたちからも「ちゆうじさん」の呼び名で親しまれている小川さん。今年9月にスペインで行われた世界マスターズ陸上競技大会で、道外3人のランナーと団体を組み、70〜74歳のクラス1600mリレー(4×400m)部門で見事に優勝、金メダルを獲得しました。タイムは4分45秒85、同クラスでは日本新記録とのこと。72歳にして、自己最高の《世界大会の金メダル》を勝ち得た小川さんに、今の心境を聞きました。

●国際大会で《金メダル》を取る
この意義は？

「隔年で開催される世界大会とアジア大会には、通算10回出場しています。70歳代のクラスとはい

え、世界のハードルは高いものです。この齢になると年々走る速さが落ち込み、維持するだけでも大変ですので、自分にとって今回の《金》は、ほかのどのメダルよりも重く、感慨深いものでした。国際大会への出場は、外国の地理や文化を見て走る《社会勉強》だと思っ

て参加してきましたし、普段から特にタイムを気にして走っているわけではないので、走り終えた後に、メンバーから日本新記録だと聞いたときは、《まさか！》と思いましたよ。次の目標は個人種目で金メダルを取ることですね(笑)。」

●陸上のほかにも詩吟や民謡など多くをたしなまれていますね

「とても自慢できる技量ではないのですが、ヒマ(暇)を作らない

陸上世界大会で"日本新"を樹立した72歳の心意気
「深く考えず好きなことをすること、決して、努力を惜しまないこと。」



ようにしています。おかげさまで体は丈夫で毎日楽しませてもらっていますよ。《健康第一》ですね。何ごとも悩まずに深く考え込まないで《好きなことをすること》が大

事だと思えます。数年前に妻に先立たれたときは、さすがに塞ぎ込みましたが、妻の顔を思い出すたび、《くよくよしていても仕方ない》と思うようになりました。今ではスポーツも文化も元気の源です。」

●今回のことで子どもたちにな何を伝えましたか？

「まず、《みんな、頑張れば(金メダルは)もらえるんだ》と強く伝えました。20年以上前に、陸上競技で有名な小監督にサインをもらったときのことです。《どうしたら早く走れるのか》を尋ねると、《努力に



▲団員の子もたちと並走する小川さん。「孫のように思える」と言う。指導は厳しいが、時折笑顔がこぼれる。



▲自己最高のメダルを手に。

勝るものはない」と告げられ心を打たれました。健康管理も大事ですし、疲れたら早めに休むことも必要ですが、決して努力を惜しまず、何でも続けることが一番だと思っております。今の教え子たちが努力を絶やさずにさまざまな苦勞を乗り越え、オリンピックの陸上競技に出場できたら、それ以上の喜びはないですね。」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

後進の育成のみならず、仕事も趣味も全力をつくす小川さんは元・自衛官。退職後は介護の仕事も長年勤められたそうです。「スポーツも文化も、リハビリも同じ。頑張れば結果が出る」と言い切る小川さん。月並みでも、豊かな経験と深味のある表情から発せられるその言葉には、物事の正しい筋道が感じられます。

プロフィール

■小川 忠治(おがわ ちゆうじ) さん/弥生在住/千歳陸上競技スポーツ少年団副代表・指導者/マスターズ陸上の国際大会出場のため夏は農家、冬は除雪のアルバイトで費用を賄う。/今年9月の世界大会70〜74歳クラスの1600m団体リレーで金メダルを獲得。